

特別
寄稿

が ん ば る  自 治 体 職 員 さん



ごみを燃やさない 埋め立てないまち ゼロ・ウェイストの実現を目指して

斑鳩町生活環境部環境対策課 課長 栗本 公生

斑鳩町は奈良盆地の西北部から矢田丘陵の南端にあり、町の南には大和川、東には富雄川、西には竜田川が流れています。面積は 14.27km² で、人口は 28,300 人（平成 28 年 11 月末時点）となっています。また、法隆寺をはじめとする歴史文化遺産が点在する、豊かな自然と歴史が息づくまちです。



ゼロ・ウェイストとは

「ゼロ・ウェイスト＝zero・waste」とは、浪費や廃棄物をゼロにするという意味の英語で、ごみの焼却、埋め立て処理をせず、資源の浪費や、有害物質・非再生可能資源の利用をやめて環境負荷を減らしながら、堆肥化等の物質回収や再生可能エネルギー利用、リサイクルによって、ごみをゼロにする考え方です。

オーストラリアの首都キャンベラが初めて「ゼロ・ウェイスト」を政策として採用し、その後ニュージーランド、北米やヨーロッパ等の各都市に広がり、日本でも徳島県上勝町、福岡県大木町、熊本県水俣市がゼロ・ウェイスト政策を実施しています。

そして、当町でも、ごみを燃やさない埋め立てないことをまちの決意として宣言するゼロ・ウェイスト宣言を今年度中に実施するため、現在、斑鳩町廃棄物減量等推進審議会で、その宣言内容、目標時期等について最終協議を行っています。



これまでの経緯

当町がゼロ・ウェイストを目指すに至った経緯には、ごみ焼却施設の老朽化が大きく関わっています。当町のごみ焼却施設は、稼働開始から 30 年を迎え、補修等に多額の費用をかけていました。新しい施設を建設するとなると、さらに多額の費用がかかるため、今後の方向性について頭を悩ませていましたが、幸運にも当町は、町長の意向で早い段階からごみ減量・資源化に取り組んでおり、ごみの量が他の自治体と比較しても少なかったため、焼却処理を民間委託する選択ができ、平成 24 年 3 月をもって町内での焼却処理を廃止しました。

しかし、民間委託をするということは、ごみの焼却を他のまちに委ねることであり、他のまちに迷惑をかけることに他なりません。そのため、当町はごみを燃やす、ごみを埋め立てるのではなく、ごみの発生を最小限にし、さらに発生したごみの資源化を徹底するというゼロ・ウェイスト政策に舵をきりました。



斑鳩町のごみの現状

当町の家から出るごみの量は、高度経済成長以降徐々に増え、平成 11 年度にピークを迎えましたが、平成 12 年度に家庭ごみ指定袋を有料化したことにより、ごみの量は徐々に減少しは

はじめ、平成 27 年度では平成 11 年度と比較し、その 34%の量が減っています。

しかし、指定袋の有料化はごみ減量化のきっかけに過ぎず、減量を維持できた要因は、平成 10 年より継続して実施している環境井戸端会議（自治会説明会）や、ごみ集積所に出した後のごみのゆくえを見学するツアー「ごみのゆくえ探検ツアー」等を始めとする、意識啓発の結果にあると考えています。

また、住民の高まった意識を低下させないよう、現状に慣れた頃に、剪定枝の分別等、分別品目を増やすなど、意図的に新たな取り組み・啓発を行ったことも効果があったと考えます。

こういったことから減り続けている家庭ごみですが、ごみの中身を 120 種類に分けて資源化可能な物の割合を分析する「ごみ質検査」の結果によると、分ければ資源となるごみをまだまだ焼却・埋め立てしている現状があり、現在、資源化可能なごみの分別の徹底に力を入れています。



生ごみ分別収集モデル事業の実施

生ごみ分別収集は、生ごみをごみ集積所に設置した生ごみ専用の回収ボックスに排出してもらうことで、可燃ごみとは区別して収集し、同じく分別収集している剪定枝と混ぜ合わせて堆肥にする取り組みです。堆肥化は三重県にある民間業者に委託しており、できた堆肥は住民に資源循環を実感してもらうため、町内で販売しています。

生ごみを分別することで、有料の指定袋代が削減できるというメリットもあり、平成 21 年度に 2 自治会の協力で開始しましたが、平成 28 年 12 月末現在では、町内の約半数の世帯にあたる 75 自治会 6,200 世帯にまで参加世帯が拡大しています。そして、この取り組みにより、当町のごみ資源化率は 55%となり、全国平均の 20%を大幅に上回ることができました。

また、生ごみ分別収集による成果はそれだけではなく、可燃ごみ焼却費用より、生ごみ堆肥化費用の方が安価であるため、ごみ処理にかかる経費の削減にもつながっています。

今後も、全町での実施に向けて自治会説明会を実施し、協力地区の拡大を図ります。



ごみ分別体験ステーション

資源化率が 55%に達したとはいえ、すでにゼロ・ウェイスト政策を実施されている先進自治体と比較すると、まだまだこれからです。さらなるごみの資源化を徹底するために、平成 28 年 9 月より開設したのが、ごみ分別体験ステーションです。

この施設では、自身が持ち込んだごみを 35 分別に分ける体験をすることで、分ければ資源となることを住民に実感していただいています。分別せずに持ち込んだごみは指定袋代がかかりますが、きちんと分ければ、指定袋代はかからないようになっているため、施設利用者は口ごみで増加しています。



ゼロ・ウェイストの輪を広げる

「燃やすごみ、埋め立てるごみをゼロに」というと、実現不可能であるといわれることも少なくありません。かなり挑戦的な目標ではありますが、ごみとして排出するものを最小限にし、どうしても排出しなければならいごみの分別を徹底すれば、必ずゼロ・ウェイストは実現できます。

私たち斑鳩町は、ゼロ・ウェイストを実現することで、ごみ焼却施設を持たないまちとしての責任を果たすとともに、この取り組みの輪を、他の自治体にも広げていきたいと考えています。